

○鶏のリンパ球性腫瘍の T 細胞性及び B 細胞性に係る免疫組織化学的再検討

京都府中丹家畜保健衛生所

○吉崎康二郎 万所幸喜

【はじめに】 ウイルス性の届出伝染病であるマレック病 (MD) 及び鶏白血病 (LL) は、いずれもリンパ球性腫瘍の形成を特徴とし、ともに野外に広く浸潤し不顕性感染が多いため、確定診断には病理組織学的検査が必要。MD は T 細胞性、LL は B 細胞性リンパ腫を形成するため、腫瘍細胞を形態学的に分析することで類症鑑別を行うが、腫瘍細胞の形状は観察までの処理に影響を受けることから形態学的分析には習熟が必要。近年、鶏の T 細胞及び B 細胞の免疫染色法が新規開発され免疫組織化学的な鑑別も可能となった。今回、鶏のリンパ球性腫瘍に係る過去の診断結果を新規開発された免疫染色により再検証し、現在の検査精度を検証。【材料及び方法】 京都府内において 1998 年から 2022 年までの 24 年間に発生した鶏のリンパ球性腫瘍を伴う MD の 7 症例、LL の 1 症例、計 8 症例を再検証。各症例において腫瘍細胞を認めた臓器の一部について HE 染色、抗 CD3 抗体及び抗 BAFF-R 抗体を用いた免疫染色を行い、過去の診断結果と比較検討。【結果】 MD 及び LL の全症例を CD3 陽性 BAFF-R 陰性の T 細胞性腫瘍と診断。一部の MD 症例で死亡から固定までの時間経過による CD3 染色性の低下傾向を確認。【まとめ】 MD 及び LL の形態学的分析による鑑別精度に課題を確認。今後は免疫染色を併用した多角的な分析により鶏リンパ球性腫瘍鑑別の検査精度の維持向上に努めたい。